No. 116 February 2022

AAINews

人と農と環境をつなぐ技術を考える

国際耕種株式会社
〒194-0013
東京都町田市原町田 1-2-3
アーベイン平本 403
tel　042-725-6250
fax　042-785-4332
mail aai@koushu.co.jp
URL www.koushu.co.jp

地域おこし協力隊を通じた就農研修

約 4 年従事したエチオピア案件の終了を機に、2020 年 11 月より茨城県水戸市の地域おこし協力隊として活動している。研修生として地域に関わりながら、果樹栽培を主とする農業技術の修得と共に、最長 3 年間の委嘱期間中の就農を目指している。地域住民と地方行政との間に立ち、農業を軸に関係を築いていくプロセスは、国際協力における活動とも似ている。

水戸市は妻の実家に近いものの、特に親戚や伝手があるわけではなく、ちょうど果樹栽培での募集があり、売り先の選択肢が多い地方都市といったあたりを決め手にした。活動先である水戸観光果樹園芸組合には、現在 10 農家が加入し、ナシ、ブドウ、リンゴを栽培している。1990 年代の 23 農家を最多に減少し続け、現役組合員の大半が 80 歳代であり、担い手の確保が急務になっている。活動当初は、組合員の農作業支援をしつつ、関係の構築に努めた。また、空き農地に果樹苗木を植栽したり、農園の一部を管理請負として任せて頂くなど、就農準備としての実践の場にも恵まれた。その他、比較的栽培が容易なブルーベリーに着目していたところ、近郊の摘み取り園でも定期的に研修を受け入れて頂いた。

研修先のブルーベリー農家夫妻

ただ、農業活動においては予想以上に難渋している。これまで国際協力事業で農業活動にも携わってはいたものの、日本での農業者としての基本理解が欠けていた。刈払機や農薬散布機の扱い方から、苗木や資材の選択や購入先もよく分からず、常に何か分からないことがある。どうにか農地をお借りできたものの、夏場はひたすら草刈り作業となった。農作業の大半は、こうした雑務が多くを占め、それを補うための経験や投資・コストが必要であることを痛感した。今更ながら、国際協力で関わった国々の状況、農業機械など無い中において、農業を生計としている人たちの逞しさを認識した。

ちょうど 1 年が経ち、徐々に意欲が認められてきたのか、果樹農園を継承してもいい…という農家も出てきた。現在、ブルーベリー摘み取り園、露地ブドウ、ナシの管理を任せられ、剪定や誘引の作業に追われている。また、新たに農地を借り、施設ブドウの栽培も計画している。個人としての作業の限界に近付きつつあるが、これでも安定的な農業収入には数年はかかる。農業機械や作業場などの初期投資が多く、非農家出身者には基盤整備がまずハードルになる。加えて、近年の温暖化の影響などから、露地栽培の病虫害が多発しており、雨よけ施設や耐性のある品種更新などの対策が求められている。

巨峰ブドウの剪定作業

今は自身の就農自立だけで精一杯だが、今後、果樹組合の持続など地域としての果樹振興も図っていく必要がある。そのためには、自分のような農家でない担い手を育成し、受け皿となる仕組みが求められている。これまでの開発コンサルタントの立場から踏み込み、実践者としての地域課題の解決に励んでいきたい。

（2022 年 1 月 吉倉）